

論文

夕形の意味を考える

——日本語学習者の運用能力に貢献する文法研究——

山本雅子

要旨

日本語学習者の運用能力の向上に貢献すべく、言語を自律した記号とみなす従来の文法研究から離れ、言語を言語主体の事態解釈の反映とみなす研究パラダイムにシフトして、夕形の意味を探ってみた。さまざまな意味が提示されている夕形であるが、認知作用の観点から見ればすべての夕形の意味は〈起点—経路—到達点〉スキーマの反映という統一的観点から説明される。事態の实在を遠隔から認識するスキーマであり、このスキーマによる事態解釈は、言語主体が事態を客体化して解釈していることを意味する。〈起点—経路—到達点〉スキーマの作用に際し、2種類の概念が付与されることにより、「過去」と、「過去」以外の意味が創出する。時間概念の付与が「過去」の創出を誘導し、予期概念の付与が「過去」以外の意味の創出を誘導する。

キーワード：遠隔，实在認識，〈起点—経路—到達点〉スキーマ，時間，予期

はじめに

日本語教育の初級文法では、過去は夕形で表すと指導するようになっている。このことから、日本語学習者は夕形で表出された事態はすべて過去の出来事とみなすようになる。そのため、「過去は夕形」と教え込まれたことから「夕形は過去」と理解していた日本語学習者は、夕形の運用に戸惑いを覚えるようになり、果たして夕形の意味は何なのだろうかと疑問

を持つようになる。そんな疑問に対し、これまでの日本語文法研究がしてきたことは、過去を含めたさまざまな用法をタ形の意味として列挙することであった¹⁾。しかしながら、このような用法の提示に留まる限り、運用能力を高めたいと思う日本語学習者の要望に応えることはできない。運用能力に繋げるためには、日本語母語話者がタ形を表出するメカニズム、つまり、言語主体がタ形を表出するメカニズムを明らかにする必要があるのである。

本稿では、日本語学習者の運用能力の向上に貢献する日本語研究の一環として、言語主体にとってのタ形の意味を明らかにする。手続としては、まず、タ形に関する従来の日本語研究の問題点、すなわち、タ形の意味を類型化し、最終的にはテンス・アスペクト・ムード（モダリティ）として説明するという研究姿勢の問題点を示す。次いで、このような研究姿勢が採られるようになった経緯の説明、およびそういった研究姿勢の打破への端緒を開いた時枝誠記の言語理論を紹介する。そして、時枝理論を精緻化すべく、認知言語学のアプローチによってタ形の意味を探究する。

1. テンス・アスペクト・ムードの問題点

タ形の意味が「類型化」される場合、類型のそれぞれに附される名称はさまざまであるが、次の例に見られるような名称が頻度の高い名称といえよう。

「一シタ」の類型化

① [完了]

- (1) 病気はもう治った。
- (2) やっと試験が全部済んだ。
- (3) 裏の庭で猫がニャーと鳴いた。
- (4) 健康が何より大事だとつくづくわかった。
- (5) 思えばこれまでおまえにもずいぶん苦勞をかけたなあ。

② [過去]

- (6) 先週の日曜日は六甲山に登った。
- (7) あのときはずいぶん腹が立った。
- (8) 下宿では毎晩集まって騒いだものだ。

③ [確言]

③-1 「事態の獲得」

- (9) わかった！なるほどそうだったのか。
- (10) しめた！

(11) (試験前夜、教科書をバタンと閉じて) 覚えた！寝るぞオ。

③-2 「見通しの獲得」

(12) (詰めにつながる手筋を発見して三一角を打ちながら) よし、これで勝った！

(13) (殺人計画の完成) これで間違いなくあいつは死んだ！

③-3 「発見」

(14) あった！あった！

(15) バスが来た！

③-4 「決定」

(16) よし、買った！

(17) ええい、やめた！

④ [想起]

(18) おれには手前という強い味方があったのだ。

(19) 君は、たしか、たばこを吸ったね。

⑤ [要求]

(20) どいた！どいた！

(21) さっさとめしを食った！食った！

⑥ [単なる状態]

(22) とがった鉛筆は折れやすい。

(23) 壁にかかった絵をごらん。

尾上 (2001: 372-374)

「類型化」された意味は、「右の①⑥はアスペクト、②はテンス、③④⑤はムードに関わるというように、それぞれ領域を異にしながらも、これら諸用法の間に内面的な関連があることは直感的に了解できる。」(尾上 *ibid*: 374) というように、最終的には、テンス、アスペクト、ムードの観点からまとめられるのが常套的な説明の仕方となっている。しかし、こういった説明の仕方は次の二つの点において問題がある。

まず、一つ目の問題である。たしかに、これらの類型化は、後付け的に見れば、付された名称の意味を担っていないわけではない。しかし、例えば、(1)「治った。」が〈完了〉と解されるのは、「もう」との共起のためであって、「5年前」と共起して「病気は5年前に治った。」となれば、「治った」は〈過去〉といわなければならないだろう。また、(2)「済んだ。」の〈完了〉も、「済んだ！」となれば、③ [確言] といわなければならないのではないか。このような交換可能な現象はうえに挙げた全ての文について説明可能である。このことから、類型化の名称に貢献しているのは、夕形というよりは、夕形と共起している言語表現に

抛るところが大きいことが明らかとなる。となると、このような「類型化」が果たしてタ形の意味を表しているといえるのだろうか、という問題が浮上する。また、こういった類型化に際して扱われるのは、多くの場合、動詞であり、形容詞や助動詞が言及されることは少なく、また、言及されない理由が説明されることもない。しかし、日本語には形容詞や助動詞にもタ形があることは事実であり、最終的にはこれらの品詞も含めたタ形の説明がなされなければならないのは理の当然といえよう。

二つ目の問題は、日本語研究において使用されるテンス、アスペクト、ムード（モダリティ）という用語の問題である。これらはすべて西洋言語を説明する概念を表す用語である。テンスについては発話時に関連づけられた出来事の時間的位置を意味する文法範疇であり、これは日本語についても同一の概念で解されており、問題はないようであるが、他方、アスペクト、ムード（モダリティ）という用語については、日本語研究では独自に解釈した使用がなされることが多い。たとえば、アスペクトについてみてみよう。Comrie (1976) は、アスペクトとは場面の時間構成に関わる概念であるとし、内的な時間構成に関わる imperfective（不完結相）と、内的な時間構成には関わらない perfective（完結相）との2種類に分けている。一方、高橋（1989: 119）は、アスペクトを「動詞のあらわすうごきの過程のどの部分を問題にするかという、文法的な意味を「すがた (aspect)」という。」と定義し、「とき (tense) やきもち (mood) が（せまい意味の）語形によってあらわされるのにたいして、すがたは、文法的な単語づくりによってあらわされる。」とし、文法的な単語として、「している」「してある」「してしまう」「しておく」「してくる」「していく」「しはじめる」等々の26個の「単語作り」が挙げられている。ここでは、アスペクトという用語を、他言語での研究用語とは異なる意味で用いているのであるが、このように本来の意味を拡大解釈して用いる傾向は、現在も日本語研究におけるアスペクトに関する論文に散見するところである。

同様に、ムード、モダリティの解釈についても混沌を極めた様相を呈している。ムードとは、英語では、直説法、仮定法、命令法などの「法」であって、文の述べ方の種類に対応する形式とされている。一方、「モダリティとは何か、モダリティをどう定義するかは大変難しい問題である。その理由はいくつもあるが、とりわけ、従来、この名称でよばれてきたものの中身が均質ではなく、意味的にも、形態的にも、帰納的にも多様なものを含んでいることをまず挙げることができる。」（山田1990: 1）とあるように、世界の諸言語についてもモダリティの概念は実にさまざまに解釈されている。そんななか、日本語では、ムードとモダリティが同義で解されたり、モダリティが「述べ方」「発話の様式」を表す部分である。」（仁田2000: 4）というように非常に広義に捉えて説明されることもある。

以上述べてきたように、従来のタ形の説明として常套的な〈「類型化」→「テンス・アス

ペクト・ムード (モダリティ)』といったパターンは、「類型化」それ自体にも、「テンス・アスペクト・ムード (モダリティ)」という用語の解釈にも問題がある。にもかかわらず、従来の研究がこういったパターンを常套的に用いてきたのは何故だろうか。次節では、その理由を時枝誠記の説明から明らかにするとともに、このようなパターンからの解放を求めた時枝の理論を紹介する。

2. 時枝誠記の言語理論

2.1 足場としての泰西言語学の理論

そもそもテンス・アスペクト・ムード (モダリティ) は、西洋言語学によってもたらされた概念である。これらの概念を、明治以降の日本語研究が取り入れていった経緯を時枝は次の様に説明している。

明治以前の國語研究においては、國語全體を文法的體系に組織立てるといふ事は殆ど努力されなかつた。それは當時の研究が主として古典の解釋あるいは歌文の制作のためであつたところから、その必要に應じて、語の類別をするといふ試みは、富士谷成章、鈴木胤、釋義門、富樫廣蔭等によつてなされたけれども、それは勿論研究の主體ではなかつた。江戸末期に至つて、和蘭文典の輸入に刺戟されて、國語の文法的組織を試みた『語學新書』のごときが現はれて、不完全ながら文法的組織の存在を知らしめた。

(下線筆者) (1940: 160)

言語學が我が國に輸入せられた時、それは國語學と極めて特殊な關係に於いて結ばれたのである。この關係は、明治維新以後泰西の學術が我が國に輸入された時、諸々の學問界に共通に現れた現象として考へられるのであるが、常に對象への考察以前に、豫め學の方法理論といふものが興へられ、對象はこの方法理論に従つて考察されて來た。國語學は、その独自の研究によつて言語學に寄與することを目標とせず、言語學をその據つて以て立つべき指導原理であると考へたのである。

(下線筆者) (1941: 5)

明治以前の國語研究が、未だ理論的體系にまで組織されてゐなかつたことである。幾多の國語現象の發見にも拘わらず、これが理論的に組織されるに至らなかつたといふことは、新國語學の出發に於ける指導原理としては物足らなく感じさせたのである。明治の國語學が、泰西言語學の理論を足場に求めたことも亦やむを得ぬことであつたのである。(略) 明治以後の國語學者は、外部より興へられた理論と方法とを絶対的なもの、

不変妥当的なものと考へ、自らの力によって対象と取組む勇氣を次第に失つてしまつた。 (下線筆者) (1941: 7)

上の引用文に窺われる日本語研究の流れからは、明治以降の日本語研究がいかに安易に、西欧の言語学の理論を鵜呑みにして取り入れたかが知れる。こういった西洋理論導入の流れのなかでテンス・アスペクト・ムード（モダリティ）という、それまでの国語学には存在しなかった概念が取り入れられたのであり、さらに、現在に至っても未だ蔓延っている西洋言語学を至上主義とする研究姿勢が、夕形の意味を、テンス・アスペクト・ムード（モダリティ）という概念で説明するよう誘導しているといえよう。

泰西言語学を安易に導入する研究姿勢について、時枝は、「今日國語學の立脚地を全面的に批判し、これを確乎たる地盤に据ゑる爲には、先づ次の如き段階を踏まねばならない」(1941: 8) と述べ、この状況を脱するための二つの段階を次のように提示している。「一は、國語を對象として考察して來た我等の先行學者の研究を、理論的に再構成し、その矛盾を摘發し、その學說理論を發展せしめて、將來の研究の出發點とすることである。」「二は、泰西言語學の理論及び方法と、國語學との關係について正しい認識を持つことである。」ここで提示された二つの段階は、先に理論ありきとし、鵜呑みにしたその理論に無理矢理に日本語を当て嵌めて説明しようとする現在の言語研究においても、まさに今日的な戒めの役割を果たすものである。

では、真の日本語の姿を知るためにはどうすればいいのだろうか。そこで時枝が主張するのが、言語主体を基軸とした言語研究である。「我」の主體的活動をよそにして、言語の存在を考へることは出来ないのである。自然はこれを創造する主體を離れてもその存在を考へることが可能であるが、言語は何時如何なる場合に於いても、これを産出する主體を考へずしては、これを考へることは出来ない。(略) 言語は實にこの様な主體的な活動自體であり、言語研究の如實にして具體的な對象は實にこの主體的活動自體であるといつてよいのである。」(1941: 12) という、言語過程説の展開に至ったのである。

2.2 言語主体を基軸にして

三浦つとむ(1972)が指摘するように、明治以降の〈文法〉観には「二つの観点」がある。一つは、言語道具観である。言語道具観とは、「音声や文字として創造された、現実的な具体的な犬を意味する表現を言語とよぶならば、それ以前に存在してこの表現のために使われた「犬」の語は〈言語材料〉とよぶのが適切であるかのようにも思われてくる。そこで、すでに与えられている語すなわち〈言語材料〉を道具として運用し、思想を表現したものが言語だという言語観」(三浦 ibid: 3) である。つまり、言語を主体から自律して存在す

る記号とみなす言語観である。

一方、対極にあるのが、言語研究に言語主体を基軸とする考え方であり、時枝の提唱する言語過程説はこの考えに則っている。言語過程説について、時枝は、「言語は何時如何なる場合に於いても、これを産出する主体を考へずしては、これを考へることは出来ない。」とし、「言語は實にこの様な主体的な活動自體であり、言語研究の如實にして具體的な対象は實にこの主体的活動自體であるといつてよいのである。」(時枝1941: 12)と説明している。

この2つの言語観の対立は、言語を言語主体から自律した客観的な記号体系とみなす考え方と、言語の意味を解明するには言語主体を介在させなければならないとする考え方の対立である。言語主体の産出メカニズムを求める本稿では、その答えを求めて、言語過程説の中身を検討していく。

2.3 問題点

2.3.1 主体と客体の識別の不明瞭さ

時枝(1941)は、語を詞と辭に二大別し、「語を詞と辭に二大別することは、語の意味内容によるものでもなく、又語が獨立するか否かによるものでもなく、實に語の最も根本的な性質に基づく分類である」(p. 234)り、「詞は、思想内容を概念的、客體的に表現したものであることによつて、それは、言語主体即ち話手に對立する客體界を表現し、辭は、専ら話手それ自體即ち言語主体の種々な立場を表現するのである。」として、主体、客体の差異を次のように説明している。

主体的・客體的の別は、その表現する内容が客観的な属性であるか、主観的な情意であるかに問題があるのではない。ある内容を、客體化して表現するか、主体そのままを表現するかといふ、表現の手續き、或は表現の過程に區別があるとするのである。この場合は、主体的とは、話手に關することであり、客體的とは、話手に對立するものである。主観的な「驚き」の感情を、客體化して表現するか、客體化せず、そのままに表現するかに従つて、詞と辭の區別が生ずるとするのであるこの場合、「驚き」を客體化せず、主体的に「おや」「まあ」と表現することが出来るのは、それが話手のものである場合に限られ、第三者の「驚き」は、それが既に話手に對立した客對的な内容であるため、客對的な詞としてしか表現することが出来ない。このやうに、主観的といふことと、主体的といふこととは、相覆ふことが出来ない概念であつて、そこにこそ言語過程説の最も重要な立脚点もあり、詞と辭の類別の根據もあるのである。言語の表現の手續き上の區別を客體的・主体的といふ語によつて云い表はしたので、言語過程説の相違といふことと、それは表裏一體をなしてゐるのである。したがつて、客體的な詞に属する語

は、すべて、その語によつて、對象的に指されてゐる何ものかがあるのである。

(1975: 92-93)

上の文章からは、客体的、主体的の相違は、客観、主観の相違と誤解されがちであるが、詞と辞とは、言語主体が対象を客体的に表現するか客体的に表現するかといった、表現の仕方の相違であることが分かる。しかし、ここには、そもそも詞が表す「客体的」と辞が表す「主体的」との差異を識別する基準が示されていないという問題がある。ここには、語を二分する詞と辞の根拠の不明瞭さの弱点、つまりは、言語過程説の根幹を揺るがす弱点を見出さざるを得ない。そして、まさにその不明瞭さの弱点がタ形の意味説明の弱点へと連鎖しているのである。次節で説明する。

2.3.2 「詞」としてのタ形

『日本語文法 口語篇』においては、タ形は辞とされ次のように説明されている。「辞「た」は、ただ単に「咲く」といふ語だけに附いたものでなく、特定の主語（ここでは「梅の花」）を持つた述語に附いて句をなすと考へなくてはならない。」(1950: 213) つまり、図1が示すように、タ形は、入れ子構造を成す文の構成素のすべてを包括したとして、言語主体が主体的に対象を表現したことを表す、主体的表現であるというのである。

図-1 入れ子構造



(時枝 ibid: 213)

しかし、辞の役割である「主体的」が『國語學言論』では、次のように揺らいでいる。

「あり」に存在詞としての意味と、判断辞としての意味とが存在することは、「て」「に」と結合する場合にも現れて来ることである。

「て」と「あり」の結合。この結合が口語に「た」となった時、

昨日見た。

あなたに送った本。

右の如き「た」は明らかに辞としての用法であるが、

少し待った方がいい。

尖った山。

の如き「た」は、「……ている」の意であつて、詞としての用法である。現在では、「た」は確認的陳述を表す結果、詞としての用法は寧ろ「待っている」「尖っている」という様に、明らかに存在する概念を表すことの出来る語を別に用意するようになって來

だが、口語の「た」に右の様な二様の意味が可能なのは、その源流に於いて、存在詞として用いられた「あり」と、判断辞として用いられた「あり」の存することを物語るものである。(1941: 267)

ここでは夕形の詞としての役割も容認されているのである。となると、詞と辞の区別は言語形式では量れないということになるのだろうか。そもそも詞と辞とは語の表現の仕方を二分するものとされているのであるが、それが言語形式を識別の手立てとすることができないとなると、何が識別の手立てとなるというのだろうか。

3. 時枝理論と認知言語学的アプローチ

それまでの西洋言語学の受け売りを否定し、言語主体を基軸に据えなければならないとする言語過程説にはその成果が期待されると考えられるものの、その理論を構成する概念の不明瞭さには大いに問題が残されている。言語過程説では、詞と辞を区別するのは言語主体の表現の仕方であり、その差異は対象や事態を主体的に表現するか客体的に表現するかの差異であると主張されている。ところが、識別の要である、主体、客体についての識別基準には言及がない。この不明瞭さが最も大きな問題である。そして、この不明瞭さが夕形という一つの言語形式が辞にも詞にも解釈できるという不明瞭さをもたらしているのである。

そこで、この不明瞭さを明確にするために、本稿では言語主体を基軸にしてことばの意味を考察する認知言語学的アプローチによって夕形の意味を考えたいと思う。言葉を言語主体から自律した言語記号と見なす傾向の強い西洋言語学のなかで、近年では、言語主体こそが言葉の意味を成立させるとする主張も屢々見られるようになってきている。言葉の意味という観念と有意味性という一般的な概念について、マーク・ジョンソンは、次のように述べている。「人間がおこす出来事であれ、語や文であれ、意味とはつねに、ある人物ないし共同体にとっての意味である。語そのものは意味をもたない。語が意味をもつのは、語を用いて何ごとかを意味しようとする人々にとってだけである。(略)要するに、言葉の意味は、ある個人もしくは共同体が、その共同体にとってあることを意味するために、言葉を使用することに基づいている。」(Johnson 2001: 337) (下線筆者)

このような、言語主体との関係から言語の意味を探ろうとする研究パラダイムが認知言語学である。認知言語学のアプローチでは、「日常言語の表現は、マイクロ・レベルからマクロ・レベルにいたるどんな要素であれ、認知主体が外部世界とインタラクトし、外部世界を解釈していくダイナミックな認知プロセスの反映として規定される。外部世界の対象や事態は、認知主体としてのわれわれから独立して解釈されるのではなく、主体の投げかける視点

との関連でさまざまな意味づけがなされる。」(山梨2000: 4) とみなされる。本稿では、主体、客体の関係を、言語主体の視点構成の観点から考察する。

4. 視点構成

4.1 遠隔

夕形がさまざまな意味を表すとはいうものの、その1つに「過去」を表す意味があることに異論を唱える人はいないだろう。では、「過去」とは言語主体の認識としてどのような意味なのだろうか。時間と認識判断の相関関係について、Langacker (2008: 300) は次のように述べている。

われわれが世界を経験するのは一瞬、一瞬の連続としてであることから、直接アクセス可能なのは現在の瞬間のみである。過去はもはや直接経験することはできず、回想を通してのみ経験される。そして、未来は間接的にさえも経験されることはあり得ない。われわれは企図するか、推測するか、想像することだけしかできないのである。こういった本源的なやり方のなかで、現在に関連づけられた時間的位置と共存して、出来事を確認する程度が決定される。ある時点において、われわれが過去と呼ぶ現実は既に輪郭²⁾がはっきりしており、現在は輪郭づけをしているところであり、未来は未だ輪郭をなしていない。」(下線筆者)

上の Langacker の謂からは、言語主体が対象事態を「現在」、「過去」、「未来」の事態として認識するのに2つの要因が関与していることが知れる。1つ目の要因は体験である。言語主体が対象事態を体験を通して認識するか否かであり、「現在」、「過去」は体験を通して認識するという点で共通しており、「未来」は体験はしない。2つ目の要因は、体験を通して認識する「現在」と「過去」の識別に関わる心的距離である。「現在」は対象事態に対して「直接アクセス可能」であることから、言語主体は対象事態を自己と同位置にあるとみなしている。一方、「過去」は「回想を通してのみ体験される」ことから、言語主体は対象事態を自己から遠隔にあるとみなしているのである。

したがって、時間と認識判断の相関関係から捉えると、「過去」の意味とは言語主体が対象事態を遠隔にあるとして認識体験していることである。では、認識体験における視点構成上の遠隔とは何を意味するのだろうか。

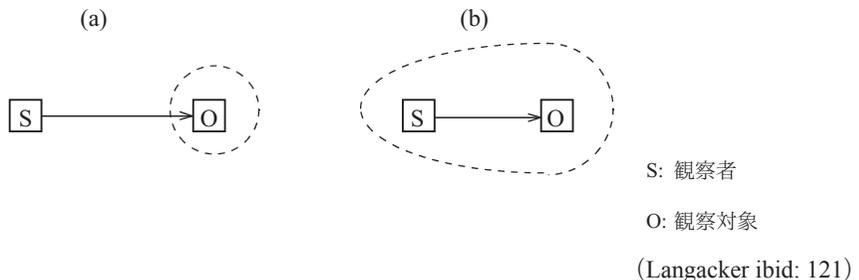
4.2 主体化と客体化

「視点」という用語は、周知のように実にさまざまな分野で使用される用語であり、かつ、その意味も多様に解釈されている。本稿では、認知言語学のアプローチから、「視点」を「記述しようとする事態や状況を話者がどのような観点から観察し、とらえ、解釈するかという言語主体の認知的作用の一側面を指す」（谷口2007: iii）と定義する。

Langacker (1985: 121) は、概念化の主体と対象との関係を構築する視点構成を、「標準的視点構成 (canonical viewing arrangement)」と「自己中心的視点構成 (ego-centric viewing arrangement)」に二分している。標準的視点構成は、観察者が与えられた事態を外側から客体的に捉える視点構成であり、自己中心的視点構成は、観察者が問題の事態の中に自分自身の視点を投入して、その事態を自らの経験として主体的に捉える視点構成である。

これら2種類の視点構成は、それぞれ図2(a)(b)に示される。Sは観察者 (SELF)、Oは観察対象 (OTHER) を意味する。矢印は視線の方向を示す。

図-2 主体化と視点構成



観察者が観察対象を遠隔に在るとして認識体験するのが、(a)で示される標準的視点構成であり、観察者と観察対象の非対称性を最大限にしている。標準的視点構成は次の(1)-(3)の条件から成っている。

- (1) 観察者と観察対象が完全に分離している。
- (2) 自身に対する意識が全く消失しているかほとんど消滅しているという程度まで、観察者が観察対象に注意を焦点化している。
- (3) 観察対象が非常に際立っており、最高に適切な領域に位置づけられている。

(1) は、観察者が自身の一面も見ることなく対象を観察している場合である。(2) は、観察者と対象の役割が完全に異なっている場合である。観察者と対象との区別が曖昧になるのは、観察者にとって自身の意識が消失した場合である。観察者が観察しているのは観察対象であって、観察対象を観察している観察者ではない。(3) は、観察対象が背景から区別され

はっきりとした輪郭をもっている場合である。対象の明確さは、観察者に近づけば近づくほど増すものの、両者のあいだにはある一定の距離が維持されなければならない。もし観察対象が観察者に重なるようにして接近すると近づきすぎることになり、ちょうど観察者が自身を完全には観察できないように、対象をはっきり観察することは出来なくなるからである。

一方、自己中心的視点構成は標準的視点構成と対照を成す。知覚体験に関連して領域が立ち現れるのはどちらの視点構成の場合も同一であり、両者の異なりは客体的領域の範囲にある。標準的視点構成では、観察者はその外側に位置し、知覚的に最適な状況となる領域が設定される。この領域が客体的領域である。これとは対照的に、自己中心的視点構成は、人が自分自身の中や、自分の周りの参与者との関連の中で持つ自分の内部から湧き起こるような関心を説明する。そのため、注意が払われる場合は、知覚的に最適な状況の範囲を超え、視覚者の位置や、そのすぐ近くのものを含むことになる。そのため、観察者はより拡大した客体的領域のなかに位置することとなり、観察者もオンステージ領域に存在していることになる。このことは、観察者が、もはやたんに観察者ではなく、ある意味では客体的対象になっているという事実を反映している。それ故、観察者の自己意識では主体的と客体的区別が曖昧となっている。

さて、夕形が反映する標準的視点構成では、観察者は最高に主体的に解釈され、観察対象は最高に客体的に解釈される。参与者が客体的に解釈されるのは、背景からも観察者からも明確に区別され、くっきりとした輪郭を持った観察対象として際立ちを帯びた場合である。そのため、完全に客体的であるには、参与者は知覚的に最適な領域に位置づけられ、明確化されていなければならない。普通、それは観察者に近い（しかし、直に接しているわけではない）位置である。この知覚的に最適な領域—(a)の破線の円—を客体的領域という。客体的領域は、視覚状況において第一義的に注意が向けられる領域であり、ステージモデルでいえば、客体的領域はオンステージ領域に当たり、ステージ上の俳優は、聴衆席にいる観察者によって完全に客体的に見られているのである。この客体化を夕形は反映しているのである。

5. 夕形の意味

「遠隔」と「客体化」の二つの概念によって説明される夕形の意味は、図3に示す〈起点—経路—到達点〉スキーマを反映する。認識主体は自己の視座を〈起点〉とし、〈経路〉を経由して対象事態の実在認識を〈到達点〉とする。この〈経路〉が遠隔を意味するのであり、事態を客体化する。

図-3 〈起点—経路—到達点〉スキーマ



〈起点—経路—到達点〉スキーマは、冒頭に挙げた類型化された夕形の意味のすべてを次のように説明する。

1. [過去]: 現実世界のなかで対象事態の遠隔での実在を焦点化

[過去]とは3.1で述べたように回想事態を経験することである。現実世界の今、ココの視座を〈起点〉とする言語主体が、回想という〈経路〉を経て、遠隔にある〈到達点〉に対象事態の実在を認識する。その認識の際に、自己の今、ココに現在という時間観念を付加すると、対象事態に過去という概念付加されることになる。また、回想経路が創出する遠隔が標準的視点構成を成す(1)(2)(3)の条件を満たすことによって、到達点で実在を解釈する事態を、観察者である言語主体は客体化していることになる。

2. [確言][想起][完了][要求][単なる状態]: 思考世界のなかで予期した事態の実在を焦点化

[過去]以外に類型化された事態はすべて、言語主体の思考世界のなかで作用する〈起点—経路—到達点〉スキーマにより表出する。【01】は[確言]として類型化される文の例である。

【01】舞の予想通り音楽も聞こえない程緊張していた杉山を導くように豊子がうまくリードした。

舞「フォールアウェイ・リバーズ、テレスポン！スローアウェイ・オーパスウェイ」

そこまで見事に決めた杉山と豊子。

舞「やった！」

(「Shall we ダンス？」: 38)

【01】は、「舞」の思考のなかで、何かが起きることを予期し始める視座を〈起点〉、心配とするさまざまな思いを〈経路〉、予期の実現の認識を〈到達点〉とする〈起点—経路—到達点〉スキーマが作用し、〈到達点〉に至った思いが夕形で表出されている。まだダンスを習い始めて間もない「杉山」がこんな大きな大会でうまく踊れるかどうか、教師の「舞」としては心配でしょうがない。〈突然音楽に乗れなくなる〉〈足がもつれて転倒する〉〈なんと

かステップだけこなす)〈人並みに踊る〉〈見事に踊る〉等々、何らかの事態が起こることを予期しつつ、「杉山」の動きを見守る。その結果、〈到達点〉に〈見事に踊る〉事態の实在を認識した「舞」は、その評価を「やった！」とタ形で言語化しているのである。

この例が示すように、[確言]とされるタ形は、予期を内容とする〈起点－経路－到達点〉スキーマを反映する。言語主体の予期の始まり視座が〈起点〉、予期の発生から〈到達点〉までの心的動きが〈経路〉、そして、その予期の実現を認識する地点が〈到達点〉となる。このような予期を内容とする〈起点－経路－到達点〉スキーマは、[想起][完了][要求][単なる状態]でも同様に作用する。[想起]では、言語主体は記憶のなかに存在すると予期する事態の実現の認識が〈到達点〉となり、それをタ形が反映する。[完了]では、事態の予期される終了時点の実現の認識が〈到達点〉となり、それをタ形が反映する。[要求]では、言語主体は、予期した事態が〈到達点〉に達したとするタ形を聞き手に投げつけることによって、聞き手に事態の実現を要求する³⁾。

最後に、[単なる状態]は〈起点－経路－到達点〉スキーマの〈到達点〉が際立って前景化されたケースである。例えば、「魚を焼いた匂い」と「魚を焼いている匂い」で説明しよう。「焼いた匂い」では、匂いを知覚した言語主体が、その匂いの正体を予期し始めた視座を〈起点〉、探索プロセスを〈経路〉、予期した事態の実現の認識を〈到達点〉としてタ形に反映させているのである。一方、「焼いている匂い」は、言語主体の今、ココでの事態認識が「ている」で表されているのである。名詞修飾のタ形は、このような予期を内容とする〈起点－経路－到達点〉スキーマを反映しているのである。

さまざまな様相を呈するタ形であるが、認知作用という観点から統括的に説明すれば、タ形の表出は〈起点－経路－到達点〉スキーマを反映するものであるといえる。自己の視座を〈起点〉、探索プロセスを〈経路〉、対象事態の実現の認識を〈到達点〉とするスキーマである。〈起点－経路－到達点〉スキーマの作用に際し、2種類の概念が付与されることにより、「過去」と、「過去」以外の意味が創出する。時間概念の付与が「過去」の創出を誘導し、予期概念の付与が「過去」以外の意味の創出を誘導するのである。そして、どの意味にも共通する観念は、事態を遠隔に解釈することであり、それは、言語主体が事態を客体化して解釈していることを意味するのである。

おわりに

日本語学習者の運用能力の向上に貢献すべく、言語を自律した記号とみなす従来の文法研究から離れ、言語を言語主体の事態解釈の反映とみなす研究パラダイムにシフトして、タ形

の意味を探ってみた。さまざまな意味が提示されているタ形であるが、認知作用の観点から見ればすべてのタ形の意味は〈起点—経路—到達点〉スキーマの反映という統一的観点から説明される。このシンプルな産出メカニズムを如何に分かりやすく、効果的に教授するかは教授法の課題である。今後はこの方面での取り組みが必要とされる。

注

- 1) 種々の日本語教育に関する事典、および日本文法に関する事典を参照。
- 2) ここでいう「輪郭」という用語は、4.2で用いられている「輪郭」と同義である。
- 3) 同じ要求でも、「買う！買う！」の場合は、「買う」という行為のみを投げつけることによって聞き手にその行為をすることを要求するものであり、「買った！買った！」のタ形のように実現の意味は含まれない。このことから、「買う！」と「買った！」ではタ形の方が聞き手に強い印象を与えることとなる。

例文出典

周防正行. 1996. 「Shall we ダンス？」『'96年鑑代表シナリオ集』映人社

参考文献

- 尾上圭介. 2001. 『文法と意味』くろしお出版
- 高橋太郎. 1976. 「すがたともくろみ」『日本語動詞のAspect』むぎ書房
- 谷口一美. 2007. 『事態概念の記号化に関わる認知言語学的研究』ひつじ書房
- 時枝誠記. 1940. 『國語學史』岩波書店
- . 1941. 『國語學原論』岩波書店
- . 1950. 『日本文法 口語篇』岩波全書
- . 1954. 『日本文法 文語篇』岩波全書
- . 1973. 『言語本質論』岩波書店
- . 1975. 『文法・文章論』岩波書店
- 三浦つとむ. 1972. 『認識と言語の理論 第一部』勁草書房
- 森田卓郎. 2000. 「基本叙法と選択関係としてのモダリティ」『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店
- 山田小枝. 1990. 『モダリティ』同学社
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』くろしお出版
- 山本雅子. 1997. 「あっ！こんなところにあった：意味構造と過去」『言語科学論集3』pp. 45-59
京都大学
- Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. Cambridge University Press.
- Johnson, Mark. 1987. *The Body in The Mind*. The University of Chicago. (菅野盾樹・中村雅之 [訳] 『心

のなかの身体』紀伊國屋書店, 2001.)

Langacker, Ronald W. 1985. Observation and speculations on subjectivity. In *Iconicity in syntax*. ed. John Haiman, 109–150. Amsterdam: John Benjamins.

_____. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press.